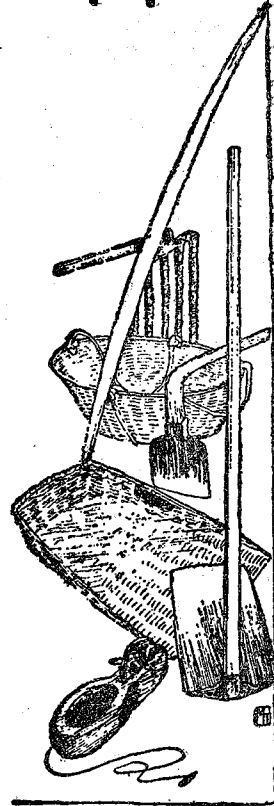


史料

東海道行脚 (八)



田 中 好

藤 枝

春をまつ、歎きは誰もあるものを、

同じ枯葉の藤枝の里。

史 料

參議雅經が詠んだ歌だ、シーボルトでも、藤枝はかなり大なる市なれど其の家屋の手入れ悪きより富の低きを窺ふに足る。などと云つてはゐるが、今はそう貧想な感を懐かしめるやうな町ではない、明治文化 大恩人、鐵道東海道線からは半里程離れてはゐるが、夫れでも青島町に在る停

車場は藤枝驛と名附けられ此處藤枝を忘れてはゐない、い

のだらう、鎌倉時代の旅行誌海道記でも、藤枝の市を通れ

や藤枝を通らなかつた鐵道の方が悪い位で、連摺戸數二千を數えて

ば花はさきかゝりなり、前島の市には波のあともしみな藤枝の花にかへつゝ。と言つてゐる。

ゐる商業小都市だ、驛と町との交通連絡は藤州鐵道の働きで十分だ

私の旅する今の東海道は、藤枝の

つたが、機關車が田に水を呑みに

今町を出て直ぐ青島村に入り鐵道東海道線に沿つて島田町に出るのである

行つたりお客が汽車の後押しをするやうな地方鐵道では、到底近代

が、慶長年代には藤枝町の本町から瀬戸川を渡り、堀の内村獅子が鼻を

交通の間に合はない、今は自動車

通つて遠州横岡村に出たこともあつたらしい、駿「雜誌は其の事を記して『河西横岡村より大堰河を越て、

が自由に活動して連絡の便を圖つてゐる位に發展してゐる町だ。

大島に上り得川居守二の澤等の山路を経て、道人澤より三社の上ウツリ澤ウツリ口

こゝ藤枝は延喜式の宿驛にこそ指定されなかつたが、風土記は、

に下り、それより初指原是まで悉く伊太村の小地名をすぎて山路にかゝり、七兵衛

大寶二年更爲ニ新驛ニ云々。と傳へてゐるから延喜の時代よりは随分

なり今西茶屋窪、東茶屋窪の小地是よ

古い宿驛だつた、唯だ延喜式に認められなかつたゞけで宿としては相當な勢力を持つてゐた

原に到る、舊爰に茶店あり名有せり、是此遺跡也、云々



り東に下り又河原に出爰を片瀬と云ふに流る也 此所を涉り

あたりの東海道は幾度か變更されたものらしい。

て西野田方樂騎前より北に入、友

形の渡を越し神明山の麓を廻り大

谷に入 此所燒餅壺の小地名あり、是往昔爰に茶店ありし遺跡なり

り、行く事三四町計りにして坂々

越し、東光寺村に至り村中を南に

過て東の方登々里澤の谷に上り、

また坂路 東光寺村、御林ある地を云也 を過り峠

に至り東に下る、此所稻葉村南の

谷と云へり、爰より南に向ひ堀の

内村に出て獅子が鼻をすぎ、瀬戸

川を渡り藤枝驛の本町に出る也、

此道は慶長九年島田の古道、大堰

川洪水の爲に流廢して行歩を得

ず、故に新に開發する處の道也、

其の後元島田に假驛を造り新道を

開く。」と言つてゐる。詰り大井川が氾濫した。お蔭で此處



昔の藤枝

瀬戸川を渡つて左に折れる道がある、行けば小部落を形つくつてゐる、前島村だ、延喜式やら和名抄乃至風土記にはこの村について何も書き立ててゐない、が併し鎌倉時代の旅行誌海道記では、前島を過ぐるに浪はたゝねども。と言つてゐたり東關紀行は、前島の宿を立ちて岡部の今宿を打過ぐる程、片山の松の蔭に立寄りて餉など取出でたるに、嵐冷しく梢に響きわたりに夏のまゝなる旅衣、うすき袂も寒く覺ゆ。と言つてゐるから前島村は當時の宿驛だったのだ、駿國雜誌は、此ことを録して

「駿河國志云、前島は古の驛家にして島田の南に在り、國

府より七里餘也。駿河名勝志云、前島は今の前島村也、島田と大井河の間にあり、名寄帳云、止駄郡前島郷前島庄、並大津庄、前島村云々、此地なるべし、里人云、前島驛は今の島田也云々、按ずるに小川を廢して當驛を置き、後又當驛を廢して島田に移し建てたるならん、其の證、小川驛は遠江國初倉驛より通ずと云を以て考ふべし、當驛より外遠江より通ずべき驛路なければ也」と言つてゐる、今の人は島田と前島とを混同したりして驛家の舊蹟争に諸説紛々と言つた調子だが、延喜式に定められた初倉驛と大井川を挾むで對立した驛家であつたに違ひない、鎌倉時代と夫れ以前の東海道は、こゝ前島から藤枝に出てるたのだ。

燒物の名にあふ瀬戸の名物は

さてこそ米も染めつけにして。

享和年間に旅した例の彌次喜多の連中も、志太村大木の橋を渡つて瀬戸に出てるて前島を通つてゐない、だから徳川の時代は東海道も變更されて、前島の驛を捨てたのぢや。

島 田

島田よいとこ大井川がござる、山で木を伐る流し出す。流す木の數百萬石よ、揚けた島田か山になる。

俚謡にあるやうに今でこそ戸數四千餘、人口二萬を過ぐる静岡縣下の一大町邑で、島田俚謡に歌はれたやうに材木商賣の町だが、併し其の前身は怪しいもので前島驛の後繼者かも判らない位のものだ、土人は、桓武天皇の延暦年代に箱根の山路を開いて東海の新道を通したから其の頃に島田驛が置かれたのぢや、と言つてはゐるが、箱根新道の開かれたことは當然に島田驛の設置を證據立てるものでもない、東鑑は、建久元年十二月十四日、前右大將家、令下三向關東、同二十三日島田云々、と言つてゐるから文献に表はれた島田は是からが始まりだ、夫れが慶長九年九月に大井川が氾濫して驛家が流され北に移轉したのが元和二年に至つて今の處に發展するやうに爲つたのだ。

東海道の古きを索ねてゐる私は、此處島田で考察せなければならぬことがある、藤枝の本町から北へ岐れて遠州横岡村に出たのが慶長年代の東海道とすりや、其の以前貞應年代の旅行誌海道記では「播豆藏(初倉)の宿を過ぎて大堰川を渡る、此川は川中に渡り多く、又水さかし、流を越え島を隔てゝ瀬々かたゝに別れたり、此道を二三里行けば四望かすかにして遠情おさへ難し、時に水風例よりも烈しく白砂霧の如くにたつ、笠を傾けて駿河國にうつりぬ、前島を過ぐるに浪はたゝねども藤枝の市を通れば花はさきかゝりたり。」と録して今の府縣道島田川崎線に依つて初倉に出た時代もあつた、初倉驛は延喜式に指定されてゐるから此時代の東海道は今の東海道より南にあつたものだ。

平安朝時代の旅を録した更科日記は「沼尻といふ所もするると過ぎて大井川といふ渡あり」と言つてゐるだけで、どの道を通つたのか判らない、鎌倉時代の東關紀行やら十六夜日記やらは何も言つてゐないが、丙辰紀行は、

『大井河は駿河と遠江の境なり、明日香川ならねど霖雨ふ

れば淵瀬かはる事たび／＼なれば、東の山の岸を流れて、島田の驛河原の中にある事あり、西の方に流れて金谷の山にそふ事あり、一すちの大河となつて大木沙石を流す事もあり、あまたの支流となりて一里ばかりが間にわかるゝ事もあり、さればいにしへより、徒杠輿梁もなり難き故に往來の人馬川の瀬を知らざれば金谷に待つもあり、島田にとゞまるもあり渡りかゝりて溺るゝ者もあり、辛ふじてむかひの岸に至るもあり、島田の民おのが家は漂ひ流るれども旅客の囊をむさほる故に洪水をよろこぶ齋旅翁が單衣にして年の寒きを待つが如し、河水の家を流し田をそこなふ故に防鴨河使防葛河使を置かれし昔の事も唯今思ひ出でざらんや。

尋常掲厲必過レ腰 叱レ馬呼レ奴魂欲レ銷
來往就レ中河處苦 無レ舟無レ筏復無レ橋

と言ひ、歸家日記は、「聞きわたる大井川にもいたりぬ、頃日は水あせ石出でて河原のみおほく續きてなほ廣く見ゆ、さいつ頃の長雨に島田金谷までひとつになりて水のた

へたるなどかたるを聞く、さらん時のさま思ひやるもい

とおそろし瀬ふたつ渡りてむかふ

の岸に著きぬ」と言つて島田を通

つてゐるから、今の東海道を通つ

たやうである、詰り今の東海道よ

り南を通つたのは上古の東海道で

北を通つてゐるのは夫れ以降徳川

以前の東海道で、今は徳川時代の

の東海道なのだ、併し徳川時代の

東海道にしても今の元島田から直

ぐ向谷に出て大井川を渡つた時代

もあつて、之を西官道と言ひ今の

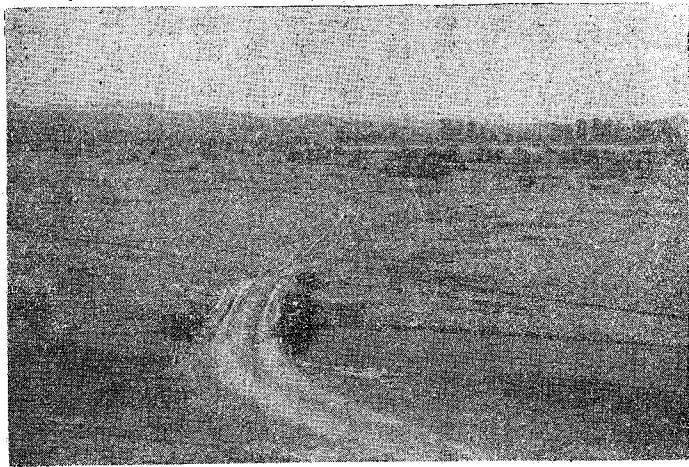
を東官道と言つて二つの道が竝立

した時代もあつたのぢや。詰り大

井川の爲に海道は變更して、何の

時代にどの道が海道であつたかを

確かめることは先を急いでゐる私の旅では不可能だ。



今 川 の 島 田

日歌ふる旅のあはれば大井川、

わたらぬ水も深き色かな。

東關紀行で詠まれた歌だか、古往

今來、東海道を旅した人の詩歌文章

に嚙立てられ行旅を悩ました大井

川。今も昔も變らない大河だ。

名に高き海道一の大井川、篠を亂

して降る雨に、打交り鳴るはた、

神、漲り落つる水音は、物凄くも

又すさまじき、夫を想ふ念力に：

……。天道様エ、聞へませぬく

くわいな、此年月の艱難辛苦も、

何卒最一度其人に、逢して給と片

時も、祈らぬ間とては無きもの

を、今日に限つて此大雨、川止と

はくエ、何事ぞいの……………。

隨分悲話を傳へ哀史に富んでゐる難所だ、いまも大井川

明天皇の承和二年に制を下されて、遠江駿河界大井川二艘

左岸の堤に朝顔目あけの松と言ふのが残つてゐて、川止めの悲話を今人に物語つてゐる、知事の長谷川久一さんが碑に「朝顔の松」と書かれてゐるのも、旅人に旅の情味を唆らすものゝ一つだ、此調子の川渡りであつたから例の彌次喜多さんさへも、鞆臺に乗つたときの危険感を表はして。

速臺に乗しは結句地獄にて

下りた所がほんの極樂。

と洒落てはゐるが、遣は海道第

一の大河だと自白してゐる位だ。

此處大井の川越え交通には何が使はれてゐたか、上古四道將軍派遣

のときや日本武尊東征のときは判らない、が併し仁

だから、橋梁舟楫の便が減退されたのは自然の勢だ、天下



(中略)宣各加増二艘以正税買備。と言はれてゐるから其の制令が下つた迄は二艘の渡船で交通の用を辨じたのを尙二艘を増加されたのだ、桓武天皇の二十年の詔勅、諸國輸送調庸而或津川無舟梁多爲民憂。貢調之時令踏次國郡設舟楫浮橋永爲恒例云々に依つて其の島きから渡船が設けられたと言ふのも強ら想像論だと否定し去ることも出来ないであらう。

世は戰國の時代と爲つて群雄が各地に割據したときには、寧ろ天險を利用して交通を不便にすることが自己防守の爲に必要なことであつた

を統一したと言はれてゐる徳川幕府に爲つても、矢張り自

己一門の防禦政略を採つて一般交通の不便をば毫も顧みな

かつたものだ。駿國雜誌の載せてゐる、元延實祿の文には

『寛永三丙寅年六月前將軍臺徳 新將軍臺猷 御上洛、海道

大名道橋等の掃除御饗應を盡す、就中駿河大納言忠長卿、

御領地大井川に浮橋或ひは舟橋と云ふをわたさる、供奉の

面々彼の橋を渡り大に感ず、然る所前將軍此橋を渡らしめ

給ひ、御氣色大に損じて、仰に曰く、此の大井川は諸國に

かくれなき關東の難所同然の所なり、東照宮御上洛のみぎ

り御辛勞にて此の河を渡らせ給ふ、橋をかけて苦しからざ

るならば、其の御時にかげ給ふべきなれども、橋なきを以て

關東の要害とす、依て世人も此の河の心安く渡り難きと思

ふ所なり、然るをたやすくかくること、東照宮の神慮にそ

むき、次には天下の名所をやぶるの罪甚しと、御機嫌以ての

外なり、御前伺候の御一門竝に諸大名恐入て承諾す云々、』

とあるから、敵軍防禦の爲に上古に折角設けられた渡船の
便を懇と廢止して大井川を自然の儘に放任したのだ。

箱根八里は馬でも越すが

越すに越されぬ大井川。

此俚諺が生れる位に旅人を惱ましたのも徳川幕府の誤つた交通政策のお蔭だ、夫れで連臺やら肩車で大井川を交通せなければならず、旅人を惱すばかりか自らの公旅にも不自由と不便を忍ぶと言ふのは何といふ無自覺なことだ、又夫れが徳川時代の經濟的發展を妨げたのだ、明治の時代に爲つて渡船の禁止を解かれ、四年四月に太政官は布告を出して、大井川従前歩行越の處旅人難澁不少に付當分の間は渡船を經營するお觸れがあつて、船夫は定められた船賃の外酒手などを取つてはならぬ、と嚴達してゐる。

封建の舊夢に眼覺めた明治の御代と爲つたのだから當然のことだ、併し維新創業の時でもあるし政府の力では到底架橋することが出来ない、已むを得ないから夏の増水期には渡船で辛棒し、冬天減水の季節には瀬口に假橋を設けて交通の便を測つたものだ。併し交通が漸増するにつれて起つてくる不便の救済は地方民の自覺心を喚起したものか、

明治八年になつて中田源藏向坂彌平次の二人が架橋の計畫を立て時の權令に出願して允許を得た、之に就て大迫林の二權令が内務卿に伺つて認許を得た公文は、明治の文化史を飾るものだ、一寸拜借する。

大井川通架橋之儀に付伺

兩縣管下東海道通大井渡船之儀は有名の大河にて殊に急

流荒瀬之儀に付聊之出水にても越立方差支支急要用に

て往來奔走致候者も空敷船待に時間を費し冬春の間河水

減小候節は聊か假橋を架し通行爲致候得共些少の出水に

ても架橋流落し往還差支候儀時に有之旅人の疾苦不尠候

處今般瀧松縣下金谷宿平民中田源藏靜岡縣管下小川村平

民向坂彌平次合併新規架橋の義別紙の通り願出候に付取

糺候處願旨許可相成候上は本橋に模擬し且つ堅固の假橋

架渡橋錢受取の些少の手數料引去殘金を兩縣廳へ預託し

利倍積立置六ヶ年の後圖面の通本橋工事着手致度旨に有

之尤橋梁保方之程は駈と見据も附兼候得共敢へて不都合

之廉も無之且往々本橋架渡候上は衆庶の辨利を得る不少

義に付速に許可相成可然と存候因て別紙書類相添此段相
何候也

明治八年十二月

靜岡縣權令 大迫 貞清

濱松縣權令 林 厚 德

内務卿 大久保利通殿

書面假橋架渡入費支消之爲向六年間橋錢收入之義申出之
趣聞届候條不取締之義無之様取計可申且滿期に至り本橋
架渡之節尙申出事。

但橋錢額其場所へ揭示可申事

明治八年十二月十七日

内務卿 大久保利通

此お許しに依つて假橋が架けられたが、之が漸次丈夫な
橋に向上していつて、明治十五年九月には長さ七百二十間
中二間の橋が架けられ大井川橋と命名された、が併し此橋
も出水ある毎に流されて交通が杜絶したことは言ふ迄も無
いことだ、鐵道東海道線が敷かれてからは橋の問題も一時
は熄まつてゐたが、自動車が入入されてからは又々鐵道敷

設前に立ち戻つて架橋問題が八ヶ間敷なつた、そこで靜岡縣が東海道の近代化を企て大正十三年三月、架橋に着手して、長さ五百六十間五分、有效巾員四間、有效高さ十五尺、百九十五尺の徑間十七から成る立派な近代的プラット式鋼構橋を、昭和三年の三月に竣功せしめた譯、何でも工費は橋の前後の取合道路のものと合せて百七十四萬三千餘圓かつたと言ふことだ、是で徳川時代に強て交通を杜絶せしめやうとした政策も打破られ、假令鐵道が不通の危に遭つても私の旅行してゐる此處東海道だけは安全に交通が出来る譯だ。例のスターお札博士なんかは廣重の繪にした大井川の涉りを賞揚するの餘りに、架橋前の渡船平凡極まるものだ、と言つてゐるが、面白半分に東海道を旅する人間ばかりがある日本ぢやない、人が生活する爲めの交通だ、此の爲めには風流ばかりを讚美してはゐられない。

金 谷

大井川橋を渡ると直ぐ金谷の町だ、今では戸數千六百と言はれてはゐるが、自然力大井川々止めと言ふ交通の不便が生んで呉れた宿驛に過ぎない、遠江風土記に「宿驛家同、東通_二島田宿_一一里。」と載せられ、駿河風土記に「下_二大碓_一而待_二海船_一而著_二金峽之岸_一」とある位で徳川以前の文獻には餘り囃されてゐない、徳川時代に爲つても井上通女の販家日記が「今宵は金谷にやどる、日は入りぬれどなほ暑ければ庭に水そゝがせなどして、障子あけて見出せば、月いとよし差入りて旅の空にもおくれぬ影あはれなり。」と言つてゐる位の所だ。

流路九十六里に亘つてゐる大井の沿川地方の經濟關係を支配してゐる金谷と島田、大井川の兩岸に相對峙してゐるが、こゝ金谷は島田の商勢には到底及ばない、夫れに何と考へたものか大井川鐵道は金谷驛に連絡してゐる、だから其の鐵道は折角敷設されたものの効果は餘り擧がらない無用の長物だと評せられてゐる、此の無用の評判ある鐵道が新國道と平面交叉して路上交通を害してゐるのは癪だ、金

谷の町勢が振はない勢であろうか、大井川橋を儲へたときに造つた新道は金谷の舊東海道を打捨て、町の裏を通つて金谷峠に差しかゝつてゐる、お蔭で金谷は昭和の東海道からラミットされ、氣の毒ではあるが近く壊滅する運命に在るのでは無からうか。

東海道は省線金谷停車場の前を横切つて金谷峠に差し掛るのだが直ぐ左に折れる幅二間位の道が、徳川時代の東海道だ、右に四間幅のが明治時代の東海道だ、いまは又夫れを改修して大井川新橋から直線に峠道を改良しやうとしてゐる、此計畫は四千五百間の山道を三間乃至六間に築造して、頂上に隧道を掘つて自動車の交通價値を擧げしめやうと言ふのだ、工事費は七十四萬餘圓で今頻りに工事を急いでゐる、之が完成したら新架橋と相俟つて東海道の交通は面目を一新するであらう。

こゝ金谷日坂の峠は、東海道を旅する私の爲には一番大切な道路だ、少し昔を物語つてみやう、明治の初年に政府が鐵道東海道線建設の方針を樹てやうとしたとき、東海道

に鐵道を敷くのは海濱が澤山あるから建設後危険が多い、中仙道を選んだ方が安全だと言ふ説が随分多かつた、此ことを聞いた地方人士は喫驚して夫れでは道路を改良せなければ東海道住民は死滅する外ないのだと言ふ意見が起つた、そこで金谷宿の住人松本權藏と言ふ人、明治七年頃からこゝ金谷日坂峠を改良して假令鐵道が敷けなくつても、交通が出来るやうにしたいと、いろ／＼劃策したが、夫れには一萬五千餘圓の金が要る、併し夫れを負擔することは到底出来ない、東奔西走して同志を糾合し、明治十一年頃静岡の富豪伏見忠七と外二人の同志を得たので中山峠開鑿結社を組織して、此兩峠の大改良事業を實行しやうとしたのだ。

その實行案は工事費一萬五千九百六十一圓二十八錢で、その内七千圓は政府から借入れ残金は松本權藏さんが百分の四十八、佐藤外二人が百分の五十二を出資して、工事完成の上通行人から道錢を取つて、三十一年間に借入金を償還し資金を消却するのであつた、此案を以て時の縣令に出

願したが、可い仕事だと言ふので内務卿伊藤博文に伺を立
てたら内務卿は直にお許しの指令
を出した。

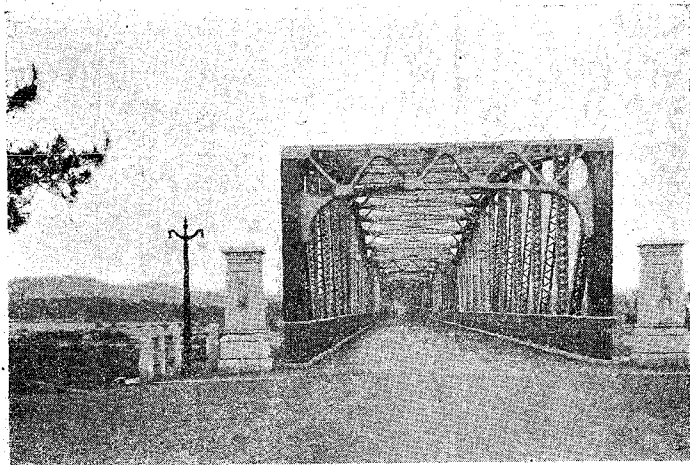
書面之趣聞居特別之譯ヲ以金七
千圓ハ此度限リ官費給與候條道
錢取立之儀ハ願人資金而已消却
之積相心得消却年季調整可差出
候且潰地之内寺院境内ハ境外ト
ナシ埋葬地ハ埋葬地ノ名義ヲ除
却シ外潰地一同官有地第三種道
路敷へ編入可致事

但在來往還之義ハ新道開鑿入
費消却後廢存處分方可伺出候
事

明治十二年九月八日

内務卿 伊藤博文

明治の初年でも道路費のやうなものは餘り私人の負擔と



辨することが出来ないやうに爲つた、夫ればかりか路錢を

今 谷 金 の 今

して給與してゐることは、明治建設
者の賢明なことを物語つてゐる、願
人は此お許しを得て明治十二年十月
十五日に起工して十三年五月三十一
日竣功せしめた、道路の延長三千六
百六十三間で橋梁は十四箇所ある、
之を八ヶ月で竣功せしめた譯だが、
工事を急いた爲と物價が騰がつたが
爲に工費は當初計畫の二倍、三萬二
千百圓四十錢を費した、そこで道錢
徴收期間を二十六年に延長して元金
を消却することゝしたが、鐵道計畫
は矢張り東海道線を採ることに爲つ
て、この時の通行者は漸次に減つて、
鐵道開通後は毎年の修繕費さえも支

取ることには汽車にも乗れないものを苦しめるものだと云ふ

鑿したことはどれだけ地方人士に利益を與へたものか判ら

苦情があるやうに爲つて、愈々新道の經營者は窮地に陥つた、明治三十三年新道を政府に献上するから未償却金一萬六千七百圓九十二

ないであらう、我國貨取道路の制が始まつたのは、此處の峠の改修から

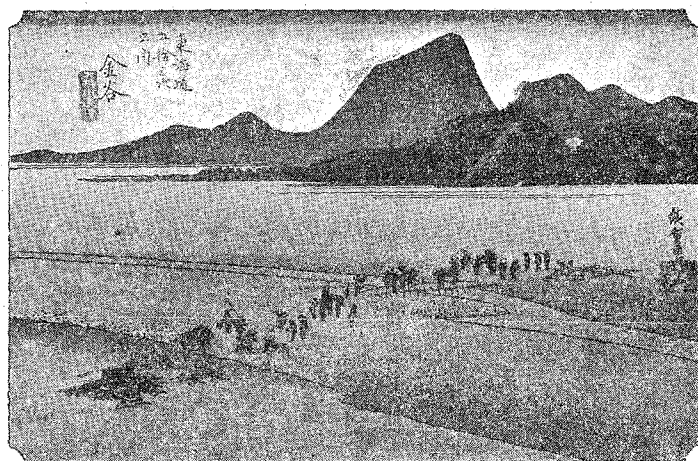
と並木を下附して呉れと言ふ出願をしたそうだが之だけは許されなかつたが、明治三十五年に爲つて

○ 延喜式時代の東海道は横尾驛から初倉驛に通つてゐたのだから、こゝ金谷峠は當時の東海道ではなかつた、建久元年頼朝關東下向のときも掛川から島田に出て島田に泊つてゐる、其の時代はどの道を通つたか判らないが、永享四年堯孝法印覺富士記に「かまづかと申あたりにて」と言ふ題で歌つてゐる所を見ると、菊川から今の初倉村字鎌塚を通つて初倉宿に出た時代もあつたやうだ、併

府に献上せしめ、之を國道としたのだ。

し文明十年道灌の平安紀行には既に、金谷驛と言ふ題歌も

新道經營者のお蔭で、今こゝの峠を通ることが出来るのぢやと思ふと故人の奉公心を賞さすには居られない、道路の通行から路錢を取るのは餘り感心しないが、夫れでも之を取つて新道を開



昔の金谷

初倉驛に通つてゐたのだから、こゝ金谷峠は當時の東海道ではなかつた、建久元年頼朝關東下向のときも掛川から島田に出て島田に泊つてゐる、其の時代はどの道を通つたか判らないが、永享四年堯孝法印覺富士記に「かまづかと申あたりにて」と言ふ題で歌つてゐる所を見ると、菊川から今の初倉村字鎌塚を通つて初倉宿に出た時代もあつたやうだ、併

ある、大永二年の宗長手記にも「佐夜中山の麓金谷といふ里一泊」とあるから此時代には菊川から金谷に出たもので、

此通路を採る爲には金谷峠を越えなければならぬ譯だ、そうすると文明から大永年間位に金谷峠と言ふものが出来たものと斷言して可い、夫れが菊川から谷金驛の裏左に折れる道に通じた東海道であつて、足利の中世頃から徳川時代―明治の初年まで東海道の交通に使はれた道だ、夫れを前に言つた、松本權藏さんのお蔭で、日坂金谷の間は北方

に路線を採つて改良したものぢや、其の改良の標準は今から見ると幼稚なものだが、明治初年の計畫としては、餘り非難も出来ない、その後縣に移されてからも随分手をかけてゐる、其のお蔭で線形こそは蜿蜒的だが、夫れでも自動車は左程の苦勞もしないで通つてゐる、唯だ惜しいことには通ると言ふだけで交通の經濟的價值とでも言ふことゝは縁が薄い、で此度の改修が企てられたのだらう。峠の中央邊りは静岡縣の重要産物と言はれてゐるお茶の畑だ、此峠が平けられることに依つて、お茶の現場取引の値段は數倍

加するであらう。

○

明治時代の金谷峠改修で東海道からは捨てられたが、昔から有名な菊川宿、いまでこそ金谷峠を通る旅人の脚底に見窄らしく見られてゐるが、菊川の溪流に沿ふて集まつた二三十戸の集團菊川の部落こそ、承久の亂以來東海道を旅した人が涙で物語つた宿驛だ。

昔南陽縣菊水

汲ニ下流ニ而延レ齡

今東海道菊河

宿ニ西岸而夫レ命

中御門入道前中納言宗行の胸中を想ふ旅人は、こゝ菊河の部落を無心に通り越すことは出来ないだらう、が併し、東關記行が言つたやうに、「其の家を尋ぬるに、火の爲に燒けて彼の言の葉も残らずと申す者あり、今は限りとして殘し置きけんかたみさへ、跡なくなりけるこそ、はかなき世の習ひ、いとゞ哀れに悲しけり。」で今は宿どころか舊い宿驛だつたとも想はれない位の部落だ。

古へもかゝるためしを菊川の

同じ流れに身をや沈めむ。

俊基朝臣東下りも、今は昔の物語りに過ぎない。併し民家から立ち上る煙も何となふ感傷的に見えて、昔宿驛の役目を勤めたことに敬意を表さずには居られない。

○

足利以降徳川時代の東海道は、こゝ菊川を出て、直ぐに佐夜中山にかゝるのだが、今の海道は夫れより北方に移されて輻員四間もある立派な海道だ。

平安朝初期に旅した更級日記は「小夜中山など越えけむ程も覺えず」と言つて済ましてゐるが、

年たけてまた越ゆへしとおもひきや

命なりけり小夜の中山。

西行の歌ばかりではない、随分昔の旅人には此處の交通に危険感を起さしめたものぢや、鎌倉時代の旅の有様を物語つてゐる海道記や東關紀行乃至は十六夜日記なども夫々の感想を物語つてゐるが、其の内で海道記は當時の佐夜の中山の光景を一番詳しく物語つたもので、之を茲に拜借し

て鎌倉時代を想ひ起すのも、私の旅としては強ち無益では無からう。

佐夜中山にかゝる、此山口をしばらくのほれば、左に深谷右も深谷、一峯ながきみちは、堤のうへに似たり、兩谷の梢を眼下に見て、群鳥の囀るを足の下に聞く、兩片は高く又山の間をすぐれば中山とは見えたり、山はむかしの山、九折の道ふるきが如し、梢はあらたなる梢、千條のみどりみな淺し、此所はその名殊に聞きつる所なれば、一時のほどに百般立ちどまりて打眺めゆけば、秦蓋の雨の音は、ぬれずして耳をあらひ、高絃の風の響は色あらずして身にしむ。

わけ登るさよの中山なかくゝに

越えてなごりぞ苦しかりける

實際舊道は山の嶺を傳つてゐたもので、海道記の感想もさこそと肯かれる、夫れでも今は幅一間半位の町村道として保存され菊川からの登り坂に少し昔の面影が残つてゐる位だ。

舊道中山の中途に佐夜山久延寺がある祭つてある一尺

あると言ふので、

子育ての観音と言ふのが有名と爲つたのち

八寸の子育観世音を中心に澤山な傳説を持つてゐる、今も旅する人が

態々新國道から舊道に出て久延

寺に參るのも矢張り此觀音のお蔭

だ、荒唐無稽と笑ふ人もあらうが、

坊さんの説明やら寺の録起を少し

許り聞くのも、東海道の子育を尋

ねてゐる私の仕事としては無駄で

無からう。

坊さんの言ふことを聞いてみる

と、昔こゝ中山で山賊の爲に孕ん

だ婦が殺された、そのとき子を産

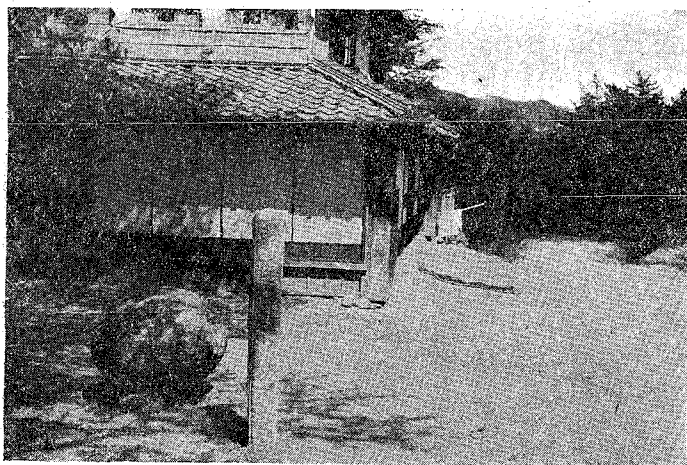
み落したので此寺の住職が憐んで

養育したが、夫れが漸々成長して

親を殺した山賊を討つて恨をばら

した、此敵討ちをさして呉れたのは此寺の觀音様のお蔭で

で、興業主は損をして江戸まで擔ぎ出しながら夜泣石は元



今 日 の 坂

や想な、俗間に八ヶ間敷言ひ囉され

てゐるあの佐夜の夜泣石と言ふの

も、詰り其の妊婦が無慘の刃に倒れ

たとき懸んでゐた石で、其の石に靈

が這入つて深夜鳴いたから夜泣石と

言ふやうに爲つたのださうな、弘法

大師が錫を此寺に駐め供養をして女

の幽魂を弔つて此石に「南無阿彌陀」

の五字を刻してから鳴くのがやむだ

と言ふことだ、夜泣石は高さ三尺は

かり周圍が一丈位ある卵形の石だ

が、傳説を持つお蔭で東京の博覽會

にまで持出され、お江戸人士の見物

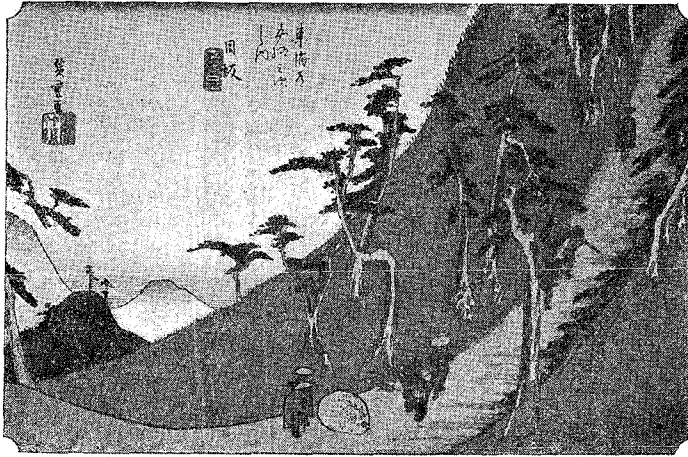
に供したこともあつたさうだが、其

の興業も餘り人氣を呼ばなかつたの

の所へは遷されもせず、今は新國道の路傍に晒されてる。土御門殿東行説話が冷かしたやうに、此石の爲に東海道の行通を妨げるやうなことは無いにしても、さぞ傳説を創造してお寺の繁盛を企てた坊主の靈が怒つてゐることだらう。

併し此寺も滿更馬鹿にしたものでもない、境内には御茶亭跡と言ふのがある、慶長五年關原役のとき家康の爲に掛川の城主が設けた茶亭と言ふことだ、今も舊藩主の寄進した茶釜が残されてゐる位だから、徳川の祖先も此寺の厄介に爲つたこともあるのだ、寶物と言はれてゐる蛇身鳥の牙やら無間の鐘の數片やら、眉唾ものゝ類だ。

史料



この寺にむげんの鐘もつきなくし

今は晦日にうそつくやらん

例の彌次さん喜多さんの洒落れてゐる位のものだらう。新田を通つて日坂の町の手前で今の國道に合してゐるのが、徳川時代の東海道だが非常に急坂な所があつて、道幅も九尺に足らない位だ、明治の改修が傳説に禍されてゐる久延寺の道を捨てたのも無理はない。

昔の日の坂

昔も今も佐夜の中山を越えた旅人は、こゝ日坂で一休みをするのに丁度可い地位にある、徳川時代の五十三驛の一つであつたことは確かだ

が、宿驛と爲つた年代は判らない、併し遠江風土記は、宿

所也、始書新坂、在佐夜中山之西麓。と録してゐる、文明十二年太田道灌の平安紀行にも、「日坂といふ山中にて」と言ふ歌題もある明應八年飛鳥井雅康の富士歴覽記では。日の坂は唯しれぬ間の名なりけり道ふみまが佐夜の中山。と詠んでゐるから足利時代らかの宿驛だつたのだらう。

日坂の名の起つた動機に就てはいろいろに囃されてゐるが、坂の西にあるから西坂と言つたのが日坂となり新坂とも言はれたと言ふことだ、夫れは兎も角、大井川やら佐夜中山の難所があつたお蔭で生育した町に違ひはない、東海道の險路難所が平けられなくつて鐵道だけが交通を支配してゐる間は此處、日坂の町も發展する運命を持たないであらう、例の土御門殿東行説話も「新坂につく、さてもきたなき宿哉、小き事行燈の如し。」と悪口を叩いてゐるが、今も其の當時と同じことだ、町勢振はず人家は海道に齒抜けたやうに竝んでゐる。

徳川時代の旅日記、丙辰紀行は、「此所の民、わらび餅を賣る、往還のもの飢をすくふ故にいにしへより新坂のわら

び餅とて其の名あるものなり、或は葛の粉をまじへて蒸餅とし、豆の粉に鹽かてゝ旅人にすゝむ、人その蕨餅なりと知りて其葛餅といふ事を知らず、諸越（サロコシ）に萩神（ハギノカミ）を買ふて老幸（オウコウ）を得たる人もありけるとかや。」と言つたのを始めとして、東海道の旅には日坂イクトル蕨餅と言つたやうに囃立てられたものぢや、例の悪口屋の土御門殿東行説話は、折角の餅も宿屋の悪かつたのに側杖喰はされたのか。

名にめでゝねぶるはかりぞ蕨餅

我しりにきと人に食はずな。

と、野次つてゐる、今の町人に蕨餅屋の所在を聞いても知つてゐる人は殆んどない位に何事も貧相な町だ。

日坂の町を出ると、是は亦町の勢に似合はない程勢の可い並木が路側に聳えて徳川の盛時を物語つてゐるのも、日坂の町勢を皮肉つてゐるやうだ。